

地域畜産振興部門

大分県豊後大野市 温見地域畜産振興会

(代表：小野 英一)

中山間地域における地域資源を 活用した肉用牛振興と地域活性化 - 地域肉用牛振興会を核とした元気のある地域振興 -



温見地域畜産振興会
のみなさん

温見（ぬくみ）地域畜産振興会のある豊後大野市朝地町温見地区は、県西南部の標高 500～600mに位置し、広大な山林原野を有し平坦地の少ない典型的な中山間地域である。田畑は山林原野の谷間に点在するため狭く、鳥獣被害もあるため、農業生産にとって厳しい条件下であるが、昭和 30 年に旧朝地町が掲げた農業振興策以降、肉用牛繁殖としいたけが基幹産業となっている。

振興会は旧朝地町の農業振興策に呼応すべく地域の生産者が昭和 30 年に設立した組織であり、飼養管理技術の研修や相互互助活動を通じて経営の向上に取り組んでいる。現在の会員数は 24 戸で、うち 16 戸が肉用牛としいたけの複合経営である。

振興会の特徴的な活動は、第 1 に地域資源を活用した放牧の実施である。地域に広がるクヌギ林に夏山冬里方式で放牧を実施しており、その面積は共同・個人を含めると約 300ha に達している。現在の同地域の耕地面積が田 52ha、畑 60ha、樹園地 5ha であることからみても、中山間地で有効な土地利用が図られている。振興会では、放牧特有の疾病を防止するための改善技術の研究を行ってきたほか、牧柵管理や牛の入下牧等共同牧野の管理を組合員が協力して実施している。これらが、放牧における飼養管理労力の低減、飼料費の節減、牛の健康を良好に維持し受胎率の向上につながるという成果をあげている。

第 2 に多頭数飼養による肉用牛団地化をめざしての取り組みである。林間放牧によって狭小な畜舎ながらも多頭数飼養を実現したほか、飼料生産機械の共同利用組合の設立、県のマニュアルを基本とした飼養管理技術の統一、青年部による月 1 回の技術検討会や女性部による子牛市場後の反省会等、様々な取り組みを実践している。また、若手メンバーが中心となって旧町内を活動範囲とするヘルパー組合を設立し、削蹄、除角、市場への運搬等重労働作業を請け負っており、高齢化（平均年齢 55 歳）の進む地域を支える体制づくりも実施している。

第 3 に肉用牛としいたけの産地共存である。当地域のしいたけ栽培は林間放牧しているクヌギを原木としており最も労力の要する原木林の下草刈りが軽減化され、また、害虫の発生や寄生が少なく、ふん尿が十分に還元され、良好な原木の生育につながっている。この結果、当地域は全国乾しいたけ品評会でもトップクラスの入賞を果たす産地となっている。

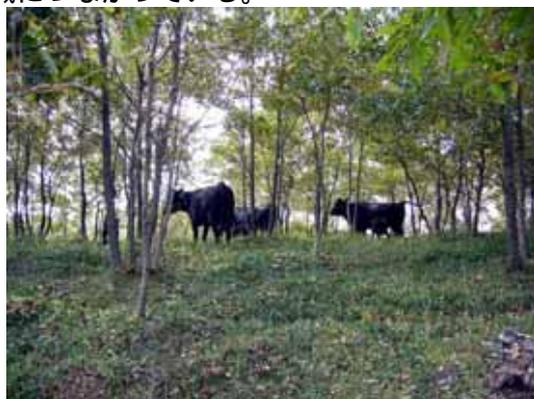
第 4 に直売・産地加工品提供施設「里の駅 やすらぎ交差点」の開設である。同所は地域農畜産物とその加工品の直売、食堂部門での提供を行っているが、地産地消の場に加えて、食育の場として、市場出荷後に関係者が情報交換を行う場としても機能しており、情報拠点である。なお、開設にあたっては、自治会や一般住民も出資するなど地域をあげての活動となっている。

以上のように同振興会は相互扶助精神のもと、地域資源に恵まれない地域を肉用牛を核としながら県内のみならず全国でも有数な農畜産物の生産地域に発展させてきた。畜産が地域に新たな産業を興し、地域経済に与えた影響からみても参考となる事例である。

山林の広がる中山間地
平坦地の極めて少ない地域にあって、森林資源を生かした肉用牛としいたけ栽培が盛んである。



林間放牧の実施
共同・個人を含め、いたるところで林間放牧が盛んである。肉用牛の飼養管理の省力化と飼料費低減につながっている。



全国有数のしいたけ産地として発展
同地域で生産される乾しいたけは、全国品評会でもトップクラスの成績を収める。産地の発展に肉用牛の林間放牧が大いに貢献した。



多頭数飼養のための自給飼料の確保
生産性向上のためには放牧に加えて飼料作付体系の導入も必要と考え、機械共同利用組合を設立し、飼料生産を積極的におこなっている。



里の駅「やすらぎ交差点」
地域の小学校閉校を契機として、振興会メンバーが地域住民の出資を募り、開設した産直施設。地域産物の提供のほか、情報交換の「場」としても機能している。



地域の農産物を販売
地域で採れた野菜、果樹、しいたけ、有機米、加工品その他、旧町内の肥育センターが出荷した「朝地牛」が販売されている。高齢のため自力での出荷が困難な者もここでの販売が可能となった。

